宮ノ下遺跡

（第3次発掘調査）

平成20年度　集合住宅建設に先立つ
宮ノ下遺跡第3次緊急発掘調査報告書

2009. 1

長野県原村教育委員会

宮ノ下遺跡（みやのしたいせき）

（第３次発掘調査）

平成20年度　集合住宅建設に先立つ
宮ノ下遺跡第３次緊急発掘調査報告書

2009．1

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の１　○印が宮ノ下遺跡

序

このたび平成20年度に実施した宮ノ下遺跡第３次発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査は、集合住宅建設に先立ち五味和久さんから委託を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

宮ノ下遺跡は、昭和57年12月と同58年３月に村道改良工事に先立って発掘調査を実施しております。２次にわたる調査で出土した縄文時代の土器と石器は僅かでしたが、広い尾根上に立地する遺跡であり今回の調査には少なからず期待をしました。

発見した住居址は１軒でありましたが、村内では発見例が少ない縄文時代前期末葉に帰属するものであり、縄文時代の研究を進めていくうえで貴重な発見であったと思っています。

発掘調査に携わるたびに、失われる貴重な文化遺産を大切にするとともに、後世に伝えて行く責任を強く感じます。

遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことでありますが、宮ノ下遺跡は役場や小・中学校に近いこともあり今後も開発は容易に考えられます。いかなる方法で保護していくことが妥当であるか検討していきたいと考えているところであります。

発掘調査にあたり、県教育委員会のご指導ならびに発掘調査に係る多くの皆様のご協力に深甚なる感謝を表する次第であります。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、お世話をいただいた皆様にたいし厚くお礼申し上げます。

平成20年12月

原村教育委員会
教育長　望月　弘

例　言

1　本報告は、平成20年度集合住宅建設に先立ち実施した長野県諏訪郡原村室内区に所在する宮ノ下遺跡第３次緊急発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、五味和久氏から発掘調査の委託を受けた原村教育委員会が、平成20年７月15日から８月20日にかけて実施した。整理作業は８月21日から12月26日まで行った。
3　現場における記録・写真撮影は平出一治、遺構の実測は小林りえが行った。
4　図面等の整理は五味さゆり、遺物の整理は鎌倉光弘、小林りえ、五味さゆり、横内かおり、渡部静香が行い、土器の実測と拓本は小林りえ、五味さゆり、実測の一部は株式会社シン技術コンサルに委託した。
5　図面の作成は五味さゆり、執筆は平出一治が行った。
6　本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料には、54の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げる次第である。

目　次

序
例言
目次
Ⅰ　発掘調査に至る経過……1
Ⅱ　調査組織……1
Ⅲ　発掘調査の経過……2
Ⅳ　位置と環境……2
Ⅴ　調査方法と層序……5
Ⅵ　縄文時代の遺構と遺物……6
　1　竪穴住居址……7
　2　遺構に伴わない遺物……13
Ⅶ　まとめ……13
参考文献
報告書抄録

Ⅰ　発掘調査に至る経過

集合住宅の建設に先立ち遺跡の照会があり計画を知ることになるが、たまたま予定地に宮ノ下遺跡（原村遺跡番号54）が所在していたため、その保護について関係者と数回にわたり協議を行った。

本来なら遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことであるが、集合住宅建設の要望は強く「記録保存やむなき」との結論に至り、平成20年度に緊急発掘調査を実施し記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

その後も調査日程等の打ち合わせを行い、原村教育委員会は五味和久氏から記録保存に係る委託を受け、平成20年７月15日から８月20日に緊急発掘調査を実施した。

Ⅱ　調査組織

平成20年度宮ノ下遺跡第３次発掘調査団名簿

事務局　原村教育委員会

教育長	望月　弘	
教育課長	百瀬　嘉徳	
文化財係長	平出　一治	
文化財係	平林とし美	

調査団	団長	望月　弘				
	調査担当者	平出　一治				
	調査参加者	発掘作業	鎌倉　光弥	小林　りえ	五味さゆり	横内かおり
		渡部　静香				
		整理作業	鎌倉　光弥	小林　りえ	五味さゆり	横内かおり
		渡部　静香				

第１図　原村域の地形断面投式図（宮川―阿久―宮ノ下―赤岳）

Ⅲ　発掘調査の経過

平成20年７月15日　発掘準備をはじめる。機材の点検、予定地の全景写真撮影を行い、重機使用の日程の打ち合わせを行う。

17日　集合住宅建設用地と取り付け道路の関係で、ほぼ南北方向のトレンチ１～７を設定する。

22日　重機でトレンチ１～７の掘削を行う。トレンチ１で住居址の埋没を認め、小竪穴状の落込みを確認する。トレンチ２～７では遺構を確認するまでに到らない。用地南端に東西方向のトレンチ８を設定し、掘削を行うが、やはり遺構を確認するまでには到らない。

検出した住居址を第１号竪穴住居址と呼び、その地点の表土剥ぎをはじめる。

23日　住居址検出地点の表土剥ぎを行う。

24日　住居址、小竪穴状落込み地点の表土剥ぎを行い、上・下水道取り込み位置にトレンチ９を設定し、掘削を行うが遺構を検出するまでに到らなかった。トレンチ３～７、９の埋め戻しを行う。

人力で第１号住居址の検出を行い、検出写真撮影後精査をはじめる。

25日　第１号住居址の精査、基本層序の観察、人力で小竪穴状落込みの検出作業を行うがローム・マウンドであることが明らかになる。

29日　第１号住居址の精査を行う。

30日　第１号住居址の精査を行う。

31日　第１号住居址の精査、土器の出土状態、土層写真の撮影を行う。

８月１日　第１号住居址の精査、土層の実測を行う。

４日　第１号住居址の柱穴等の調査、実測用の基準杭の打設を行う。

５日　第１号住居址の柱穴等の調査、遺物・礫の実測を行う。

６日　第１号住居址の柱穴等の調査、遺物・礫の取り上げを行う。

７日　第１号住居址の柱穴・地床炉等の調査、遺物・礫の取り上げを行う。

11日　第１号住居址の全景写真撮影、実測を行う。

12日　第１号住居址の実測、焼土の断割りを行う。

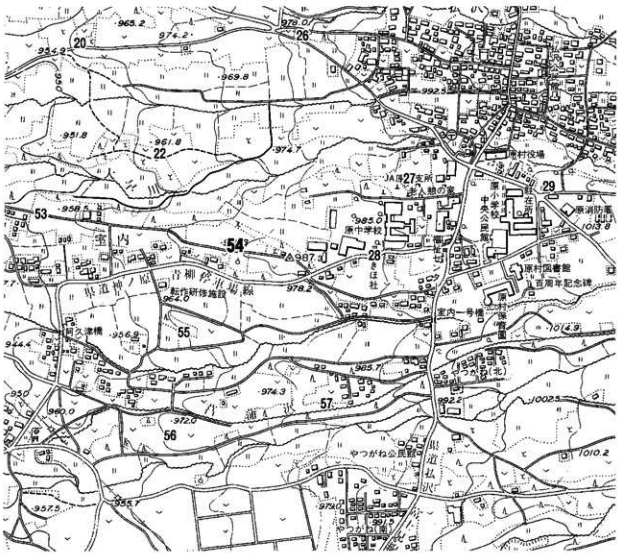
13日　第１号住居址の実測、柱穴等の再検出、機材の撤去・水洗いを行う。

20日　機材の水洗を行い発掘調査は終了する。

Ⅳ　位置と環境

宮ノ下遺跡（原村遺跡番号54）は、長野県諏訪郡原村室内区に所在する。原村役場の西方約１kmという地理的条件に恵まれていることもあり宅地化が進んできている。

この辺りは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根が幾筋も見られる。それらの



第2図　宮ノ下遺跡と付近の遺跡（1：10,000）

表1　宮ノ下遺跡の位置と周辺遺跡一覧表

○は遺物発見　◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
20	前尾根				○	◎	◎					◎	○	○	昭和44・52・53・59・平成9・15年度発掘調査
22	清水			○	◎	◎	○					◎	○		平成8年度発掘調査　消滅
26	家下					○						○		○	昭和59・平成9年度発掘調査
27	開度沢					○						○	○		昭和62・平成9・12・13年度発掘調査
28	宮平											○	○		**村史跡**　開度社境内
29	向尾根					○	○					○		○	昭和50・54年度発掘調査
53	塵源沢					◎						○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10・13・15・18・19・20年度発掘調査
54	**宮ノ下**		○	◎	◎	○						◎	◎	◎	**昭和57・平成20年度発掘調査**
55	中尾根				◎	◎	○					◎		○	平成6年度発掘調査
56	家前尾根				◎	◎						◎		○	平成6年度発掘調査
57	久保地尾根					◎	○					○		○	昭和5・平成6・7・8・13・14・17年度発掘調査

尾根上から緩やかな斜面に第２図と表１に示したように縄文時代と平安時代を中心とする遺跡が数多く点在している。

その一つである本遺跡は、八ヶ岳から流下する阿久川と大早川によって南と北を浸蝕された東西に細長い尾根上から南斜面に立地している。

尾根上の平坦部は100mほどで、標高は980m前後を測り、地目は普通畑、山林、農道等である。遺跡南にあたる阿久川側の斜面は、すでにその一部が尾根方向に走る県道神ノ原　青柳停車場線の工事で、また住宅用地として削平されたところがみられるが、付近の地形を考慮し、復原を試みると緩やかな斜面であったように思われる。なお、県道より南方は水田である。北の大早川側は比較的急激な斜面となり地目は山林で、その北方は県営担い手育成基盤整備事業払沢地区で整備された水田である。

本調査の対象地は、尾根上南側の平坦部にあたり、地目は普通畑である。

本遺跡の発見は、原村教育委員会で保管している「昭和九年闢盧社債□□尾根二テ発掘　室内小林健次郎氏寄贈」と注記された平安時代の土師器坏形土器の出土によるものと思われるが、記録がないため詳しいことは不明である。その後、注目されることはなかったが、昭和57年度に原村教育委員会は村道改良工事に先立つ緊急発掘調査を２次にわたり実施した。調査の概要は『原村誌　上巻』に記載されているが、未だ発掘調査報告は刊行できないでいる。

第１・２次緊急発掘調査について若干ふれてみたい。

第１次緊急発掘調査は、対象面積は270㎡で昭和57年11月９日～12月１日に実施した。縄文時代の小竪穴１基と江戸時代末から現代と考えられる汐址１を検出した。遺物の出土は少なかったが、縄文時代の土器は前期最末の籠畑式土器破片、石器は打製石斧・乳棒状石斧・凹石・黒曜石の剥片等である。また、平安時代の土師器と灰釉陶器の小破片、中世の鉄鏃があり、縄文時代、平安時代、中世の複合遺跡であることが明らかになった。

第２次緊急発掘調査は、対象面積は300㎡で昭和58年３月25日～31日に実施した。小竪穴８基と第１次調査同様の汐址１を検出した。やはり出土した遺物は少なかったが、縄文時代早期の押型文土器破片、前期最末の籠畑式～中期初頭九兵衛尾根式土器破片、土偶の脚部破片２点（同個体のものであろう）、石器は石鏃・打製石斧・凹石・黒曜石の剥片等である。

限られた範囲の調査であるが、小竪穴９基を検出したが伴出遺物はなく帰属時期は明らかにできなかったが縄文時代の所産と考えている。出土した土器は小さいうえに磨滅した破片が多く、160点余りと少ないが前期最末の籠畑式が主体となるが、原村誌では「遺跡の性格を語ることはできないが、今後の調査に期待がもてる遺跡である。」と結んでいる。

本調査で前期最末籠畑期の竪穴住居址１軒を検出した。第１・２次緊急発掘調査でも、籠畑式土器破片が出土しており、前期最末を中心とする遺跡であることが明らかになる。

村内の前期最末の遺跡に目を向けてみると、南に隣接する中尾根遺跡（原村遺跡番号55）で平成７年度に、北に隣接する清水遺跡（同22）で平成８年度に竪穴住居址を検出している。また、昭和50年に大石遺跡（同49）で小竪穴を検出しているが、今までに確認できた該期の遺跡は少ない。

遺跡数が少ない時期であるにもかかわらず、本遺跡、中尾根遺跡、清水遺跡は隣接しており極めて強い係りを持つ遺跡群であったと思われる。したがって個々の遺跡単位で考えるよりも遺跡群を一つの単位と考えた方がよいのかもしれない。

Ⅴ　調査方法と層序

発掘調査の対象地は、第３・４図に示した集合住宅建設予定地、駐車場、取り付け道路、上下水道布設箇所である。

調査は、集合住宅の建設予定地と取り付け道路の関係からほぼ南北方向にトレンチ１～７を設定した。トレンチの掘削は重機で層位別にソフトローム上面まで行い、遺物の出土状況と遺構の把握を進めた。その後、用地南端に南北方向にトレンチ８、上下水道布設箇所にトレンチ９を設定し同様の調査を行った。トレンチの巾は重機のバケット巾である1.0mである。

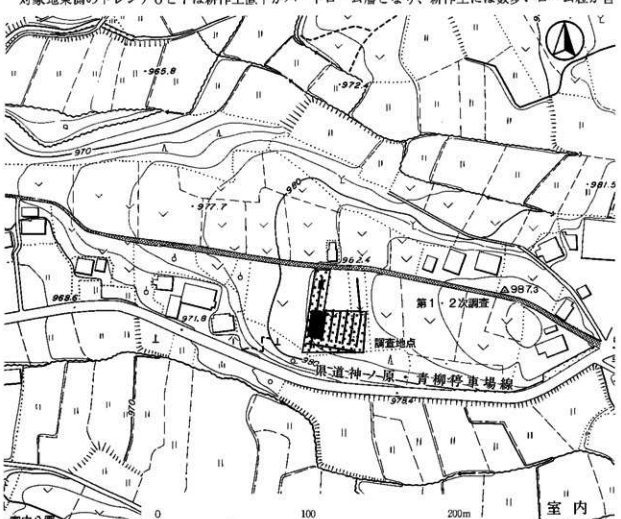
トレンチ１で確認した竪穴住居址については面的調査範囲を設定し、重機で層位別に表土剥ぎを行い引続き人力で遺構の検出作業を行った。遺構の検出面はソフトローム上面である。

出土した遺物は、住居址に伴うものは第１号住居址、伴わないものはトレンチ別に取り上げた。

遺構の測量は、予め打設した基準杭を基に１m四方の方眼を設定したやり方の方式による。

調査面積は379.6㎡で、第１号竪穴住居址に係る面的調査は187.0㎡である。

対象地東側のトレンチ６と７は耕作土直下がハードローム層となり、耕作土には数多いローム粒が含



第３図　発掘区域図・地形図（１：2,500）

まれていた。西側のトレンチ１と２はローム層までは深く、長い年月におよぶ耕作により黒色土は西から東に移動し平坦化されていた。また、灌漑用井戸の掘削による撹乱が広範囲におよび遺跡の保存状態はあまり良くない。

前述したとおり褐色土・黒褐色土の厚さはトレンチによりまちまちであるが、調査地区西端の土層を基本層序と考え第Ⅰ～Ⅳ層に大別した。

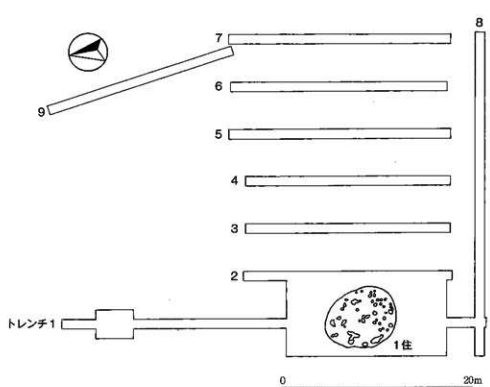
第Ⅰ層　褐色土　20cm　畑の耕作土である。
第Ⅱ層　黒褐色土　17cm
第Ⅲ層　褐色土　13cm
第Ⅳ層　ソフトローム

Ⅵ　縄文時代の遺構と遺物

第４図に示したようにトレンチ１～９を調査し、トレンチ１で縄文時代前期の竪穴住居址１軒と小竪穴状の落込みを確認した。検出作業で小竪穴状の落込みはロームマウンドであることが判り調査から除外した。したがって検出した遺構は竪穴住居址１軒だけである。

本遺跡から住居址の検出ははじめてのことであり、算用数字を用いて第１号竪穴住居址と呼ぶことにした。

トレンチから出土し住居址に伴わない遺物は少ない。土器は全て小さな破片ばかりで、石器は黒曜石の剥片がある。



第４図　遺構配置図

1　竪穴住居址

第1号竪穴住居址（第4～8図、写真2～9）

尾根南傾斜部やや北寄りの平坦部で検出した。大きな竪穴住居址で重複の可能性を考慮する中で検出作業を進めたが、重複を確認することはできなかった。

土層の観察は自然傾斜の東西方向で行い、第5図のとおり1～3に分けた。色調の変化に乏しく不明瞭な点もあるが、その状態から重複が確認できるものではなく、いわゆる逆三角堆土と三角堆土がみられた自然埋没である。

大まかな埋土の観察結果は次の通りである。

1　炭化物・ローム細粒混じりの黄褐色土。床面近くには焼土粒が混じる。

2　ローム粒混じりの黄褐色土。3よりローム粒が多く黄味が強い。

3　炭化物・ローム細粒・ローム粒混じりの褐色土。ローム粒が多く褐色が増している。

出土した遺物は少ないが土器と石器がある。住居址の東側に多くみられたが、土器は床面から数cm浮いた破片が多く、一括の同個体土器でも1/6程が残存しただけである。石器も同様でやはり床面から数cm浮いたものが多い。凹石は床面直上から出土したものがある。

東壁際から横転した長さ35.2cmの棒状の御荷鉾緑色岩が出土した。叩痕と手磨れ状の磨滅がみられ、形状から立石の可能性が考えられるが、該期における立石の出土例は聞いていない。この御荷鉾緑色岩を取上げる際、直下からまとまった黒曜石の砕片が出土した。埋土の洗浄で120点を採集したが、いずれも極小で1㎜に満たないものが最も多く、1～4㎜位のものである。大きな1点も5×12㎜である。石器を作成する過程で生じた砕片で一括廃棄されたもののようである。

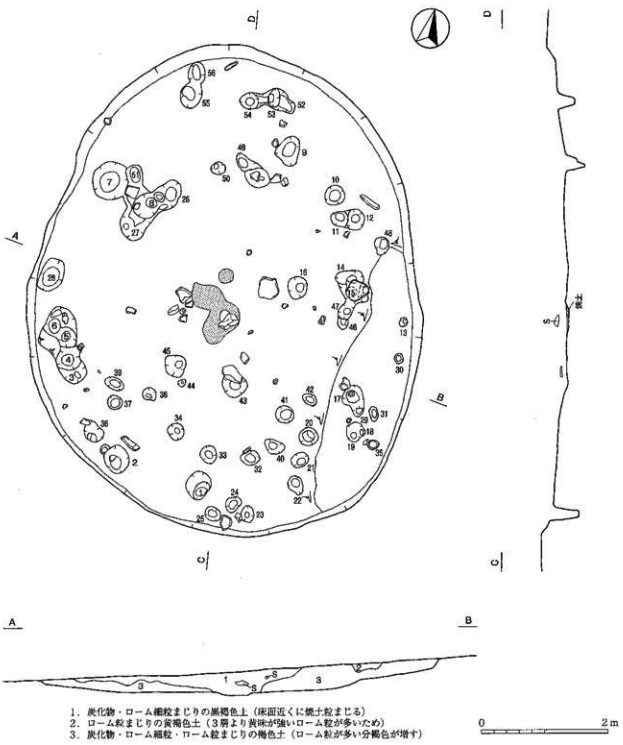
炉址南東と北東の床面に当地方で豪出する輝石安山岩の平板石が据え置かれていたが、作業台と思われるものである。南東のものは28×28cm程で、叩痕と磨滅痕がみられ火熱によりひび割れが生じている。北東のものは35×30cm程で、やはり叩痕と磨滅痕がみられる。

埋土中には大小様々な安山岩の礫がみられた。床面直上から出土したものもあるが、上記2点以外に叩痕や磨滅痕は認められなかった。使用の痕跡を認めることができないため性格不明の自然石と考えたが、竪穴内から出土したものであり道具として利用された可能性は高いものばかりである。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので長軸745cm、短軸626cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは不明確なうえにだらだらとし緩やかで良くない。壁高は北東が高く20cm前後、南西が低く7cm前後である。床面は壁際が高く中央の地床炉に向かい低くなる。東壁際は顕著で数cm高い平坦な床面がみられたが重複によるものではない。部分的にタタキ床も認められたが総体には軟弱である。

ピットは、柱穴と性格不明のものがある。主柱穴は6基と思われるがいずれも3～4回の重複が考えられたが、上面に貼床が施された柱穴がないうえに、個々の埋土も色調の変化に乏しく新旧関係および同時性を明らかにできなかった。上記した東壁際の数cm高い床面の際には同規格の柱穴状のピットが並ぶ。性格不明のピットが多いため規模等は表2にまとめた。

炉址は、火床である焼土を住居ほぼ中央付近から北寄りで4ヶ所検出した。平面規模に若干の違いはみられたが、焼土化は著しいものばかりで浅くすり鉢状に窪んでいる。焼土の厚さは中央付近の3ヶ所は8cm前後、やや北寄りのものは3cm程を計り、いずれも下層は火熱で変色している。地床炉4ヶ所は同時に使用されたものではないが、新旧関係は明らかにできなかった。



第５図　第１号竪穴住居址実測図（１：60）

柱穴と地床炉のあり方から３～４回におよび同心円状の建て直しは容易に考えられるが、不明瞭な点が多く明確なことはわからない。

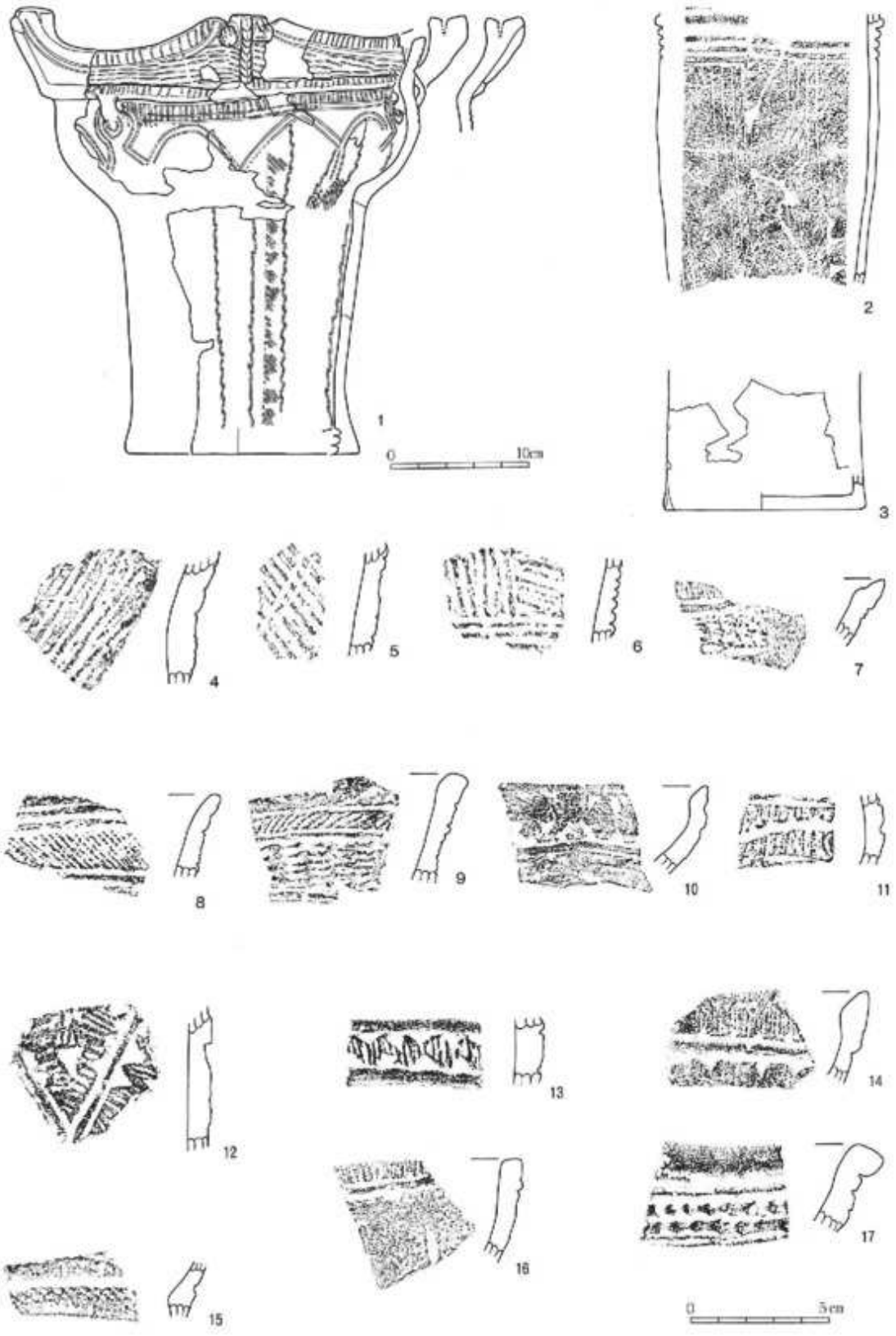
出土した遺物は少ないが土器と石器がある。

土器は、６分の１程の破片から図示した（第６図１）の口縁部突起を４単位としたが、５単位であるかもしれない。（２）は内面に赤色顔料が僅かに付着するが性格は不明である。破片は総数555点で、同一個体土器もみられたが復原できる状態ではない。小さいうえに磨滅したものが多く（４～39）を図示した。(23) と (24) は同個体、(39) は繊入土器である。なお、図示できなかったが焼成前に径１㎜弱の小穴が穿たれた破片がある。１㎝に満たない小破片で性格は不明である。

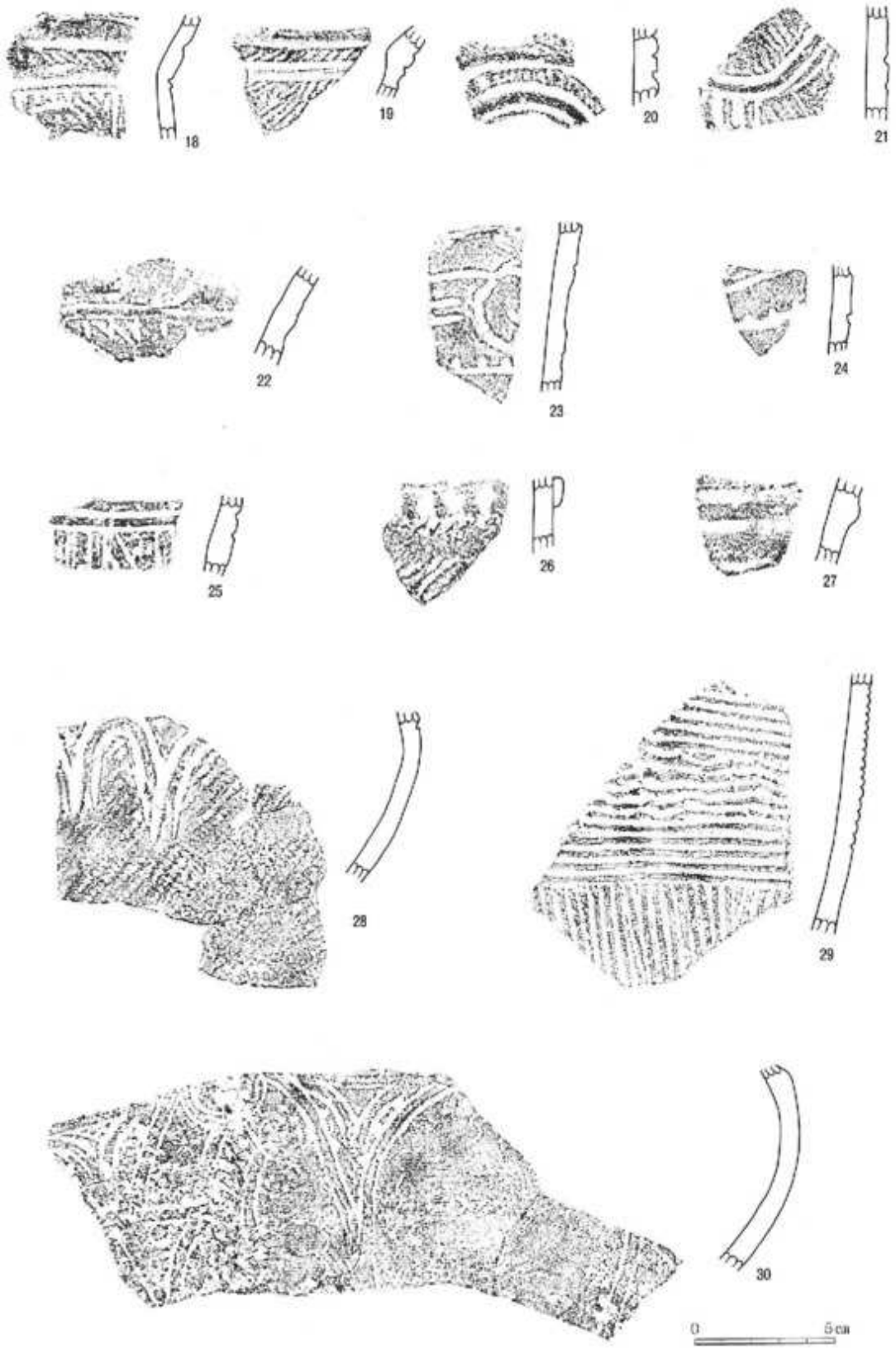
石器は図示できなかったが石鏃８点、石錐１点、スクレーパー２点は黒曜石製。横刃形石器１点はスレート製で、抉れ加工部には手擦状の僅かな磨滅がみえる。磨製石斧１点は片刃の角閃玢岩製で、乳棒状石斧の破損品を再加工したものであろう。凹石・叩き石・磨石類は片手で握ることができる輝石安山岩製の12点で、火熱により変色したものが２点ある。使用痕の肉眼観察で凹石１点、磨石１点、叩き石４点、凹石＋磨石３点、凹石＋叩き石１点、凹石＋磨石＋叩き石１点、特殊磨石１点に分けた。棒状叩き石（棒状礫器）１点は千枚岩製で、僅かな打痕がみえる。作業台である台石２点、立石１点、堆積岩の剥片３点、チャートの剥片１点、黒曜石の剥片255点、極小砕片は120点で総重量0.5ｇである。なお、黒曜石の剥片の中には使用痕がみられるものもある。

表２　第１号竪穴住居址ピット一覧表　　単位はcm

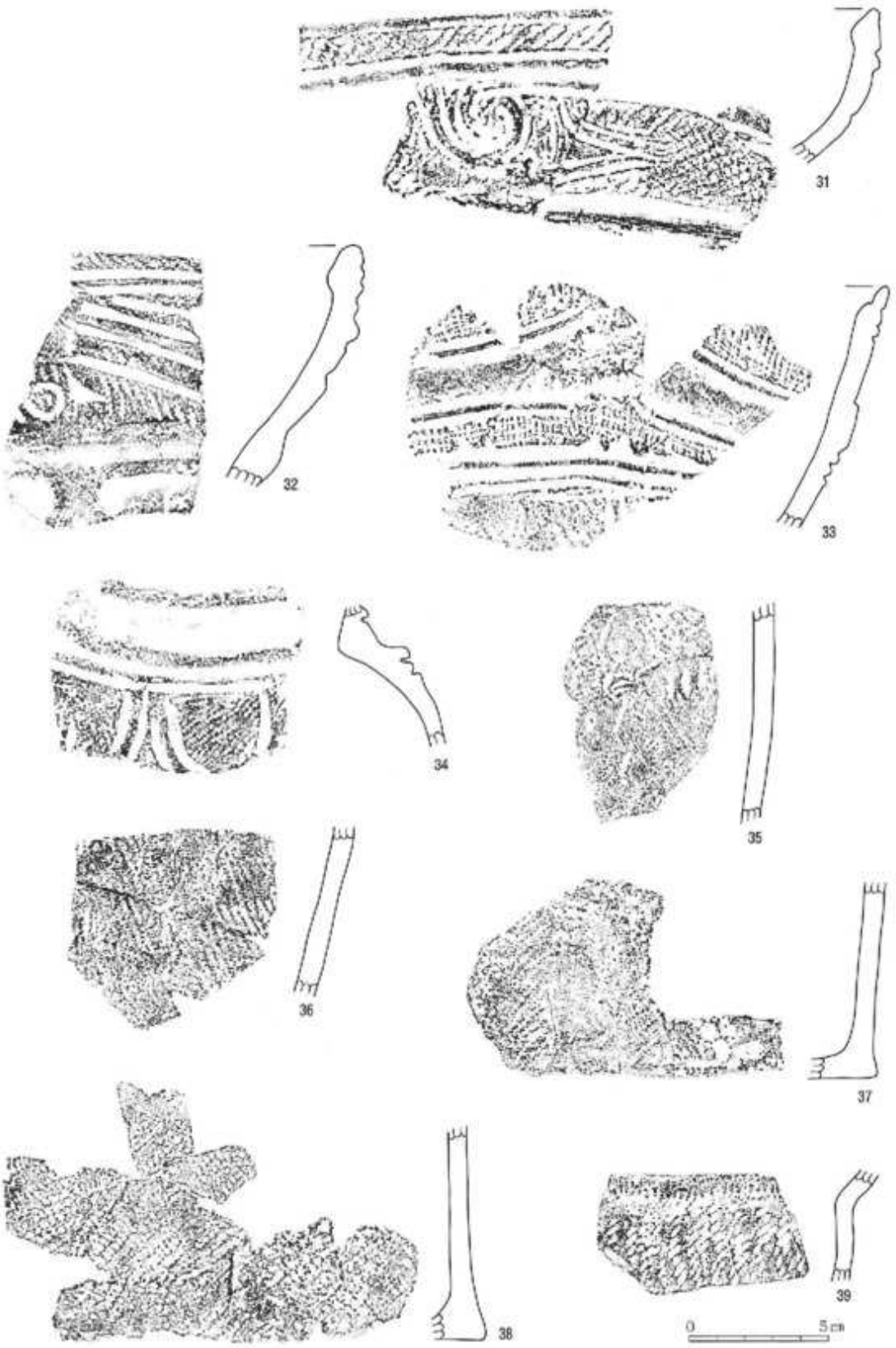
番号	長軸	短軸	深さ	備　考	番号	長軸	短軸	深さ	備　考
1	32	21	55		28	54	42	24	土器破片１点 黒曜石剥片１点
2	43	37	43	土器破片３点					
3	38	(22)	25	黒曜石剥片３点	29	(22)	22	27	
4	40	(36)	49		30	18	16	20	黒曜石剥片２点
5	(32)	(32)	65		31	24	14	6	
6	50	(28)	55	土器破片１点	32	31	24	9	
7	61	61	56	２基の重複 土器破片３点	33 34	28 26	25 26	8 53	
8	(50)	(40)	60	土器破片２点 黒曜石剥片３点	35 36	18 35	17 26	7 15	
9	46	37	60	２基の重複	37	23	22	16	
10	33	30	38	黒曜石剥片１点	38	22	20	9	
11	(27)	24	65	黒曜石剥片２点	39	32	20	6	
12	32	(26)	53	土器破片２点	40	34	21	20	
13	16	13	18		41	29	27	38	
14	44	(30)	46	２基の重複 黒曜石剥片７点	42 43	25 40	17 36	6 42	
15	35	(30)	41	黒曜石剥片１点	44	15	10	18	
16	38	31	27		45	34	34	42	上面に台石
17	36	(30)	54	黒曜石剥片１点	46	(18)	16	26	
18	28	(16)	26		47	(32)	21	45	
19	25	(20)	32		48	29	23	42	
20	30	30	46	土器破片３点	49	(28)	19	30	
21	27	23	47	黒曜石剥片２点	50	24	19	19	
22	30	23	49	土器破片２点	51	(35)	25	30	炉と重複、炭化材
23	27	19	50		52	30	(28)	9	
24	26	23	14	叩き石１点	53	32	(22)	59	
25	26	22	46	黒曜石剥片１点	54	(38)	26	26	
26	(47)	36	43	上面に貼床か？	55	(40)	33	13	
27	(41)	43	78		56	(33)	26	15	



第6図　第1号竪穴住居址出土土器実測図・拓影（1～3　1：4、4～17　1：2）



第7図　第1号竪穴住居址出土土器拓影（1：2）



第8図　第1号竪穴住居址出土土器拓影（1：2）

2　遺構に伴わない遺物

出土した遺物は少ないが、縄文時代の土器と石器がある。

土器は、小破片ばかりで図示できなかったが、トレンチ１～３・８から出土した16点と表採11点は前期最末の籠畑期のものである。

石器は、黒曜石の剥片１点が出土しただけである。

Ⅶ　ま と め

本調査は集合住宅建設という限られた範囲で、縄文時代前期最末籠畑期の竪穴住居址１軒を検出しただけである。

昭和57・58年に実施した緊急発掘調査では、僅かな前期最末の籠畑期を主体とする土器破片と石器が出土しただけである。３次にわたる発掘調査で得ることができた資料は少ないが、前期最末の遺跡であることが明らかになった。

本遺跡は国史跡阿久遺跡の直後に位置し、阿久遺跡の終焉から中期遺跡群へ変遷していく過程を究明するうえで極めて貴重であるが、村内には遺跡は少なく謎が多い時期であるといわざるをえない。

「Ⅳ　位置と環境」でも述べたが、村内で確認できた前期最末の遺跡に目を向けてみると、南に隣接する中尾根遺跡（原村遺跡番号55）、北に隣接する清水遺跡（同22）、北西方向2.3kmの比丘尼原遺跡（同９）で住居址、南西方向1.5kmの大石遺跡（同49）で小竪穴を検出しているが、いずれも縄文時代中期を主体とする集落遺跡である。

中尾根・清水の両遺跡とは沢を挟み対峙している。中尾根遺跡までは直線距離で250m、清水遺跡までは300mと狭い範囲内にあり、３遺跡は強い係りを持っていたように考えられる。中尾根・清水の両遺跡で検出した前期最末期の遺構の分布状態は希薄であり、従来の集落概念とは異なることになるが、宮ノ下・中尾根・清水の３遺跡がまとまり一つの集落を形成していたと考えてみた。検出した遺構および出土した土器・石器を詳細に分析した結果ではなく、発掘現場で対峙する遺跡を見ていて感じたことである。いずれにしても遺跡立地をはじめ集落のあり方など数多い研究課題が投げかけられた調査のようである。

最後に、猛暑の中発掘調査にたずさわった方々ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

1985　07　原村役場『原村誌　上巻』

1996　03　原村教育委員会『中尾根遺跡　平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書』

1997　03　原村教育委員会『清水遺跡　平成８年度県営圃場整備事業原村西部地区及び県営担い手育成基盤整備事業払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書』

写　　真

写真1　調査地区
（北東から）

写真2　第1号竪穴住居址
検出状態（南から）

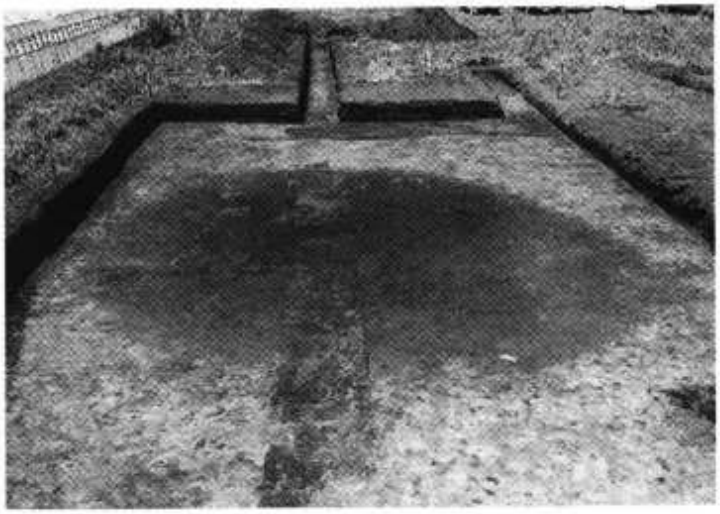


写真3　第1号竪穴住居址
全景（南から）

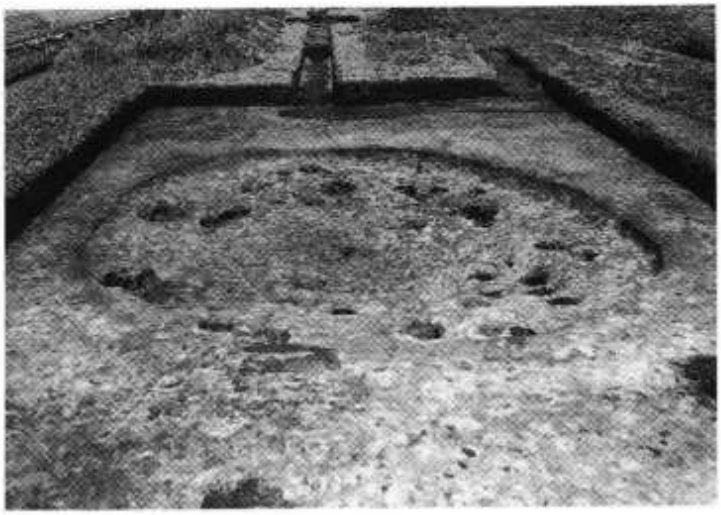


写真4　第1号竪穴住居址
地床炉

写真5　第1号竪穴住居址
土器出土状態

写真6　第1号竪穴住居址
土器出土状態

写真7　第1号竪穴住居址
出土石器

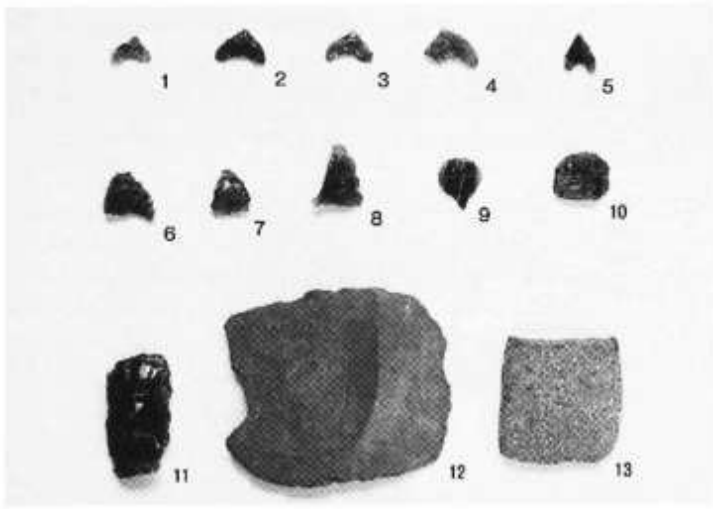


写真8　第1号竪穴住居址
出土石器

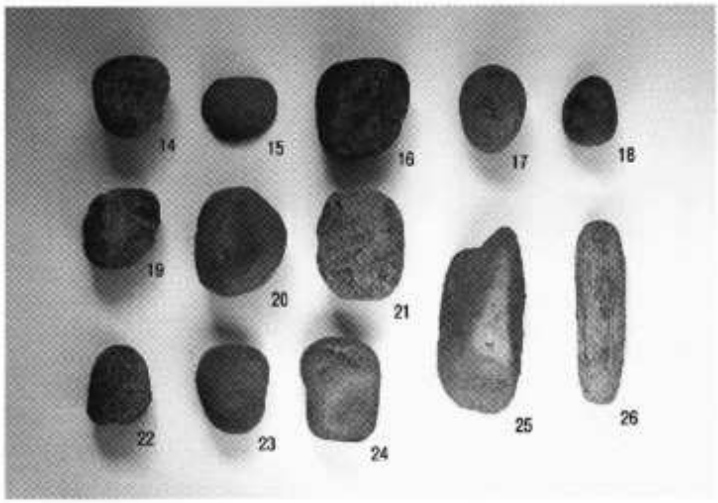


写真9　第1号竪穴住居址
発掘風景

表3　第1号竪穴住居址出土石器一覧表

カッコ付けの数値は破損品の現在値を示す。備考No.は取上げ番号

番号	名　称	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石　材	備　考
1	石鏃	(0.7)	1.2	0.1	(0.3)	黒曜石	先端欠
2	石鏃	1.0	1.6	0.1	0.5	黒曜石	
3	石鏃	0.9	1.4	0.1	0.4	黒曜石	
4	石鏃	1.3	(1.7)	0.1	(0.7)	黒曜石	片脚欠
5	石鏃	1.3	0.9	0.1	0.3	黒曜石	
6	石鏃	(1.7)	(1.5)	0.2	(1.0)	黒曜石	先端・片脚欠
7	石鏃	1.4	1.2	0.3	1.0	黒曜石	未完成？
8	石鏃	2.0	1.6	0.5	2.0	黒曜石	未完成？
9	石鏃	1.6	1.3	0.1	0.6	黒曜石	
10	スクレパー	1.7	1.5	0.4	2.4	黒曜石	
11	スクレパー	4.1	2.2	1.0	11.6	黒曜石	
12	横刃形石器	6.8	7.9	0.8	65.0	スレート	
13	磨製石斧	(4.4)	4.3	(1.1)	40.0	角閃玢岩	No.9　再加工
14	凹石	7.8	9.1	7.0	555.0	輝石安山岩	No.4
15	磨石	(3.1)	7.9	7.9	(185.0)	輝石安山岩	No.2　欠損
16	叩き石	9.5	9.7	7.8	1,070.0	輝石安山岩	No.8
17	叩き石	6.7	9.4	5.6	435.0	輝石安山岩	P24
18	叩き石	5.7	7.6	5.1	270.0	輝石安山岩	
19	叩き石	7.3	8.7	5.9	570.0	輝石安山岩	
20	凹石＋敲石	9.2	11.4	7.8	1,005.0	輝石安山岩	No.1　火熱で変色
21	凹石＋磨石	8.8	11.5	6.8	755.0	輝石安山岩	
22	凹石＋磨石	(8.0)	6.3	5.4	335.0	輝石安山岩	欠損
23	凹石＋叩き石	7.3	9.2	5.4	415.0	輝石安山岩	No.3
24	凹石＋磨石＋叩き石	8.1	10.8	6.0	705.0	輝石安山岩	No.7　火熱で変色
25	特殊磨石	9.9	18.3	8.3	1,715.0	輝石安山岩	
26	棒状叩き石	19.3	5.0	4.2	655.0	千枚岩	No.5
	作業台　台石	28.0	28.0	6.7		輝石安山岩	No.10　火熱で亀裂
	作業台　台石	35.0	30.0	10.5		輝石安山岩	No.11
	立石	35.2	8.0	6.6		御荷鉾緑色岩	No.6
	剥片　3点					堆積岩	
	剥片　1点					チャート	
	剥片　3点					黒曜石	P3
	剥片　1点					黒曜石	P8　使用痕
	剥片　2点					黒曜石	P8
	剥片　1点					黒曜石	P10
	剥片　2点					黒曜石	P11
	剥片　7点					黒曜石	P14
	剥片　1点					黒曜石	P15
	剥片　1点					黒曜石	P17
	剥片　2点					黒曜石	P20
	剥片　2点					黒曜石	P21
	剥片　1点					黒曜石	P25
	剥片　1点					黒曜石	P28
	剥片　1点					黒曜石	P30
	剥片　229点					黒曜石	
	砕片　120点					黒曜石	微小

報告書抄録

ふりがな	みやのしたいせき
書名	宮ノ下遺跡（第３次発掘調査）
副書名	平成20年度　集合住宅建設に先立つ宮ノ下遺跡第３次緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	73
編著者名	原村教育委員会
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-0192　長野県諏訪郡原村6549番地１　　℡　0266-79-7930
発行年月日	2009年１月

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
宮ノ下（みやのした）	長野県諏訪郡（ながのけんすわぐん）原村室内（はらむらむろうち）	3637	54	35度 57分 48秒	138度 12分 46秒	20080715 ～ 20080820	379.6	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ下	集落址	縄文時代	前期最末 竪穴住居址　１軒	前期最末 土器、石器	

要約

検出した竪穴住居址は縄文時代前期最末諸磯期の１軒である。745×626cmの楕円形で壁・床面の状態は良くない。重複する柱穴、地床炉のあり方から３～４回におよぶ同心円状建て直しが行われているようである。遺物は少ないが土器と石器がある。

原村の埋蔵文化財73

宮ノ下遺跡（第３次発掘調査）

平成20年度　集合住宅建設に先立つ
宮ノ下遺跡第３次緊急発掘調査報告書

発行日　平成21年１月

発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印　刷　ほおずき書籍㈱

丸山
896.8
904.3
990.9
902.3
894.2
908.3
905
917.3
900
924.0
907.5
912.0
903.6
896.7
913.5
906.1
908.3
916.5
927.3
924.0
898.5
924.2
880.8